

京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書（終了）

1. 研究課題

（和文）日本の文学理論・芸術理論

（英文）Theories of Literature and Arts in Japan

2. 研究代表者氏名

大浦康介

3. 研究期間

2011年04月 - 2015年03月（4年度目）

4. 研究目的

日本ではこれまで（主に大学で）どのような文学・芸術理論が教えられてきたか、また日本に「土着の」文学・芸術理論があるとしたらそれはどのようなものか—これら二つの問いが当研究班の中心的課題となります。前者は明治以降における英・独・仏の文芸理論の移入という問題と重なるでしょうし、後者は近代以前も含めた、日本の歌論、物語論、芸能論、批評理論等の掘り起こしとその西洋理論との突き合わせという問題だと言い換えられるかと思えます（もちろん現代日本の作家や批評家の「理論」も排除しません）。これらの問いを西洋理論の専門家が提起し、日本の文学や芸術の専門家を交えた場で討論するというのがポイントかと考えています。

6. 研究成果の概要

本研究班の研究成果である『日本の文学理論——アンソロジー（ベータ版）』（京都大学人文科学研究所, 2015）は、アンソロジーと小論文集という二つのセクションから成る。アンソロジーは、1. 小説論、2. 描写論、3. 物語論、4. 詩的言語論、5. フィクション論、6. 読者論、7. 起源論・発生論、8. 文学とは何かという8つのテーマ別に章立てされ、各章冒頭には総論が置かれている。総論は、当該テーマは西洋理論ではどのように位置づけられ、扱われてきたか、また近代日本ではそれについて何が書かれ、議論はどのような歴史的展開を見せたかといった問題を大まかに論じたものである。この総論に続いて、各章五つないし六つの文献抜粋が発表年順に、解題とともに配されている。小論文のセクションには、アンソロジーでは扱えなかったテーマ（「ジャンル」論、「文学入門」研究）のほか、海外とのかかわり（中国文学理論の影響、欧米の私小説研究）や隣接する諸学（美学、映画理論、文芸社会学）を論じたものを収録した。またコラムとして、文学理論にかかわる二つの「叢書」の試みを紹介し、巻末には文学理論関係の和文献と洋文献（日本での翻訳）を配した文献年表を付した。

8. 共同研究会に関連した公表実績

【出版】大浦康介編『日本の文学理論——アンソロジー（ベータ版）』京都大学人文科学研究所, 2015 【公開講演会・シンポジウム】 2011年12月18日: 木村朗子、安藤徹、高木信『『日本文学からの批評理論』をめぐって』 2012年3月5日: 石原千秋「戦後、日本近代文学研究の方法」 2012年11月19日: 齋藤希史「明治日本の批評言語」 2013年7月22日: 谷川恵一「遺稿集という言説空間」 2014年3月16日: 中村三春「根元的虚構論と文学の魅力」 2014年3月30日: 坪井秀人「危機／終焉言説と学問批判」 【電子媒体】日本の文学理論・芸術理論 web ページ (<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~theory.jp/>) 文献リストなど

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

本研究班の作業は、今後、平行して進めてきた科研の共同研究（基盤研究 B「日本近代における文学理論的言説の総合的研究——西洋理論の移入と伝統的文学観の変容」）に引き継がれる。そこで計画されているのは、『日本の文学理論——アンソロジー（ベータ版）』についての国内・海外（ルーマニア、台湾、フランス、アメリカ等）での意見交換をつうじたバージョンアップと「正式版」の出版、「文芸学」、「虚構論」等の特定テーマについてのシンポジウムなどである。